

第四十二回 台東薪能

令和四年九月六日（火）午後五時開演
於・金龍山浅草寺境内（雨天時 浅草公会堂）

〈火入れ式〉 木遣り・纏振り 第五區木遣り会

番組

能

子方（牛若丸） 坂 瞳子
トモ（弁慶ノ従者） 石井 寛人

前シテ 後シテ（武蔵坊弁慶） 坂 真太郎

橋辨慶

間（郡の者） 山本泰太郎
（郡の者） 山本 則孝

大鼓 柿原 孝則
小鼓 鶴澤洋太郎

笛 一噌 隆之

狂言

土筆

シテ（遊山の者・甲）

山本泰太郎

アド（遊山の者・乙）

山本 則孝

〈休憩〉

能

前シテ 後シテ（葛城ノ神） 観世 喜正

ワキ（山伏） 森 常好

ワキツレ（山伏） 館田 善博

間（里人） 山本凜太郎

大鼓 柿原 弘和
小鼓 鶴澤洋太郎

太鼓 小寺真佐人
笛 一噌 隆之

能『橋辨慶』

武蔵坊弁慶は宿願があつて五條天神へ丑の時参りをしていた。ある日「五條橋で十二、三歳の少年が蝶・鳥のような神変を見せて人を斬りまわった」という噂を聞いた従者が、今夜の参詣をやめるよう注進する。「臆して逃げたと言われては名折れ、退治してくれる」と勇み立ち、薙刀をさぐいて夜更けを待つ弁慶。やがて秋の月が照らす五條橋上に女性と見紛う美しい少年が佇む。「京の五條の橋の上、大の男の弁慶が…」の歌詞で知られる童謡『牛若丸』そのまま、能舞台に展開します。

狂言『土筆』

佐保姫の筆かとぞ見るつくづくし 雪かき分くる春の景色は―鎌倉時代の歌人藤原為家の歌です。雪解けの土の中から顔を出すつくづくしは、春の女神佐保姫の絵筆のようだ、ということです。

野遊びに出た二人の男はつくし摘みに興じます。そのうち、つくしを詠んだ歌をめぐって言い争いになり、拳句は相撲で決着をつけることに。

他愛ない喧嘩も春を迎えた嬉しさがなせる業。ほのぼのと楽しいお話です。

能『葛城』

秋の『橋辨慶』、春の『土筆』。冬の『葛城』。『葛城』は、修験の聖地葛城山を背景とする雪の能です。

降りしきる雪に行く先を見失った修験者たちは、ふと現れた里女に導かれて庵に宿をとる。女は火を焚いて修験者たちをもてなしながら、役の行者の咎めを受け葛城で縛られ苦しんだ葛城の神の昔語りをした…。

里女こそ葛城の神の化身です。修験者たちに救済を求め、加持を待んで姿を消した里女は、やがて女神の本体を現すと清浄で神秘的な舞を舞います。伝説を踏まえた、冷え冷えとして神々しい美しい能です。

附祝言

終演予定 午後八時